

【絵画】



1.
しほんちやくしよくもくれんしゆるず わたなべしこう
紙本著色木蓮棕櫚図<渡辺始興筆/>

二幅

重要美術品（昭和14年7月13日認定）

江戸時代

法量 白木蓮幅 110・7×41・7cm

棕櫚幅 110・6×41・5cm

渡辺始興（1683～1755）は、京都で活躍した江戸時代中期の画家。狩野派や尾形光琳の画風を学び、また古画の模写なども行い伝統的なやまと絵画風をも身につけ、宮廷や近衛家の御用を勤めた。

本図は、右幅には満開の白木蓮はくもくれんに朱い花あかを付ける椿つばきと背景のヒバを、左幅には葉を広げ黄色い花を付ける棕櫚しゆるの幹と、その根元に青い花を付ける桐きりが描かれる。たらし込みを駆使した墨描を基調とし、控えめながら効果的に使用された鮮やかな色彩がアクセントとなり、全体を清澄な画面に仕上げている。始興が光琳画風から学んだ表現を創作に的確にいかしている点で評価できる。

【彫刻】

2. 銅造薬師如来坐像

一軀

重要文化財（昭和63年6月6日指定）

鎌倉時代

法量 像高14.1cm

奈良興福寺に伝来した金銅仏で、宝相華をあしらった光背に七軀の薬師化仏を配し、いわゆる裳懸宣字座もかけせんのじざに坐る図像は、8～9世紀の作である新薬師寺本尊木造薬師如来像（国宝）と一致し、同像の縮小模像もぞうとして造られたとみられる。小像ながら背筋を伸ばし堂々とした姿で、端正な面貌めんぼうや引き締まった躰軀たいく、深く力強い衣文えもんの象形などに鎌倉時代中期、13世紀半ば頃の南都仏師の作風が顕著に認められる。右手の全てと左手先を別鑄すべとする技法にもその頃の傾向を示し、薄く均一に鑄上げる技法や、台座文様を刻出するタガネこくしゆつの使い方など、その巧緻こうちな出来ばえは当代金銅仏中でも出色のものと評価される。



3. もくぞう に てんのうりゅうぞう 木造二天王立像

二軀

平安時代

法量 像高 阿形151.4 cm, 吽形155.0 cm

あうん 阿吽一對の神将形像で、久安3年（1147）の造立銘ぞうりゅうを有する阿弥陀如来坐像（国有〈文化庁保管〉、重要文化財）に随侍する像として小泉策太郎（三申）が所蔵していた。阿吽像それぞれの背面に記された宝永2年（1705）の修理銘により丹波国船井郡大久保村（現在の京都府船井郡京丹波町上大久保）長楽寺に伝来したことがわかる。阿弥陀如来像とは衣文えもんの彫り口や特徴的な耳の彫法などが一致し、当初よりの一具とみてよい。阿弥陀像と同内容の造立銘を有する根津美術館地蔵菩薩像（重要文化財）を加え、更にこれと対をなす観音像の存在を想定し、阿弥陀を中心とする五尊像として造られたと考えることができる。



【工芸品】

4. 梵鐘 ぼんしやう 一口

重要文化財（昭和27年7月19日指定）

平安時代（貞元二年=977年）

法量 総高22.9 cm 龍頭高5.2 cm 口径15.5~16.0 cm

中世以降、喚鐘かんしやうとして用いられた小形の梵鐘である。身の高さに比べて径が大きく、側面は曲線をもって裾広がりになる。龍頭は扁平な鑊形すそで、幅が狭く丈が高い。三区の池の間には以下の銘文を陽鑄ようちゆうする。

第一区「飯高郡／上寺金」

第二区「願主亥／甘部子／村子」

第三区「貞元二／年正月／十一日」

この種の小鐘には、延喜11年（911）在銘の延光寺鐘（高知県）などが遺存するが、年紀在銘の梵鐘としては、延喜17年（917）在銘の栄山寺鐘（奈良県）以降、本鐘を除き、永暦元年（1160）在銘の廢世尊寺鐘〔金峯山寺〕（奈良県）に至る約250年間知られていない。

平安時代前期の数少ない紀年在銘の梵鐘として極めて貴重である。



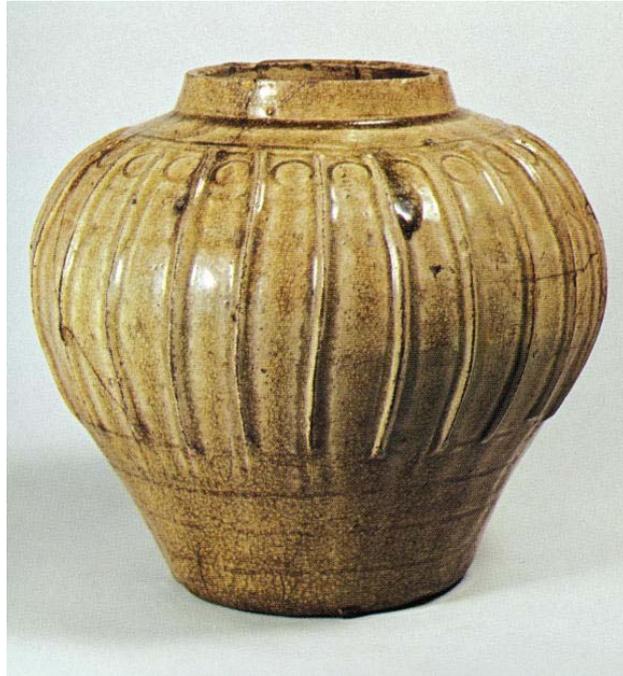
5. 瀬戸灰釉突帯文広口壺

一口

南北朝時代（14世紀）

法量 高20.0 cm 口径10.0 cm 胴径22.2 cm 底径11.0 cm

愛知県瀬戸窯の灰釉広口壺である。本壺は龍泉窯青磁の酒海壺と呼ばれる有蓋^{ゆうがい}広口壺を本歌としている。中世瀬戸窯の主要な製品である広口壺の中で、手本とした中国陶磁の姿をよく伝えた最盛期の作品で、胴部の一部に窯割れ等による亀裂が入るものの全体が残される。日本の中世における陶磁器生産の在り方を具体的に示す極めて貴重な資料である。



6. いろえさんすいかおくもんおおざら
色絵山水家屋文大皿

一枚

江戸時代（17世紀）

法量 高10.0 cm 口径44.5 cm 高台径20.5 cm

古九谷色絵の中でも、緑・群青・紫などの寒色系の濃厚な上絵具を主体とし、内外面の地を黄色で賦彩する青手と呼ばれる大皿の作品である。大皿の腰に段を作り出す青手の典型的な器形の内面に、大樹の下に小さなお堂を配した山水家屋を表し、背景の黄色地には波文を充填するが、色絵は見事に発色している。典型的な青手の作品で、口径45cm近い作品の遺例は多くはない。典型的な古九谷色絵青手の大作で仕上がりも良い貴重な作品である。



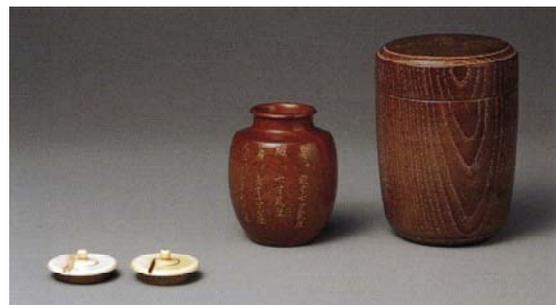
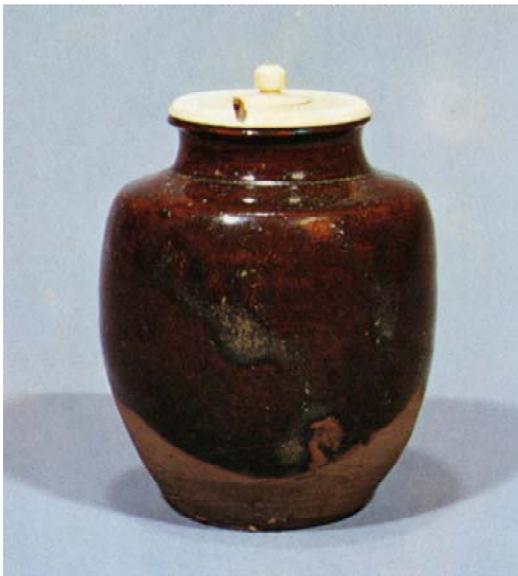
7. かんさくかたつきちやいれ 漢作肩衝茶入 めいざんげつ 銘残月 一口

南宋時代（12～13世紀）

法量 高8.2 cm 口径4.0 cm 胴径6.7 cm 底径3.9 cm

唐物の肩衝茶入で、口頸部こうけいぶが高く、端を強く外反がいはんさせる。肩には丸味があり、胴はわずかに張る。釉薬は鮮やかな柿色かきいろを呈し、肩には残月状に青白の釉溜ゆうだまりがあり、反対の胴にも青白色の釉が流れる。

唐物茶入で最も高く評価された肩衝茶入の優品で、数少ない東山御物ひがしやまぎもつの大名物である。織田有楽、前田利家、徳川家康、榊原康政、榊原忠政、京極安知、泉屋六郎右衛門、松平不昧ふまいに伝来し、茶道文化史上、極めて貴重な作品である。



8. いろえなべしまからはなもんおおざら 色絵鍋島唐花文大皿 一枚

江戸時代（18世紀）

法量 高8.1 cm 口径29.9 cm 高台径14.8 cm

佐賀・鍋島藩が経営に直接関わり、徳川将軍家他への献上品を生産した鍋島藩窯の色絵磁器である。口径約30cmのいわゆる尺皿で、内面には唐花を五方に配し、間を唐草や輪文わもんで繋ぐ。裏面には染付そめつけで七宝結び文を描き、高台には櫛歯文くしぼもんを廻らす。文様は赤・緑・黄等の上絵具で描き唐花の花弁には赤の点描を施す。

本作品は鍋島の色絵大皿の中では比較的珍しい文様となるが、江戸時代の最高級磁器として洗練された図様が見事な色絵で表現される。遺例の極めて少ない色絵大皿を代表する優品である。



【書跡・典籍】

9. 継色紙（よしのかは） 一幅

重要文化財（平成16年6月8日指定）

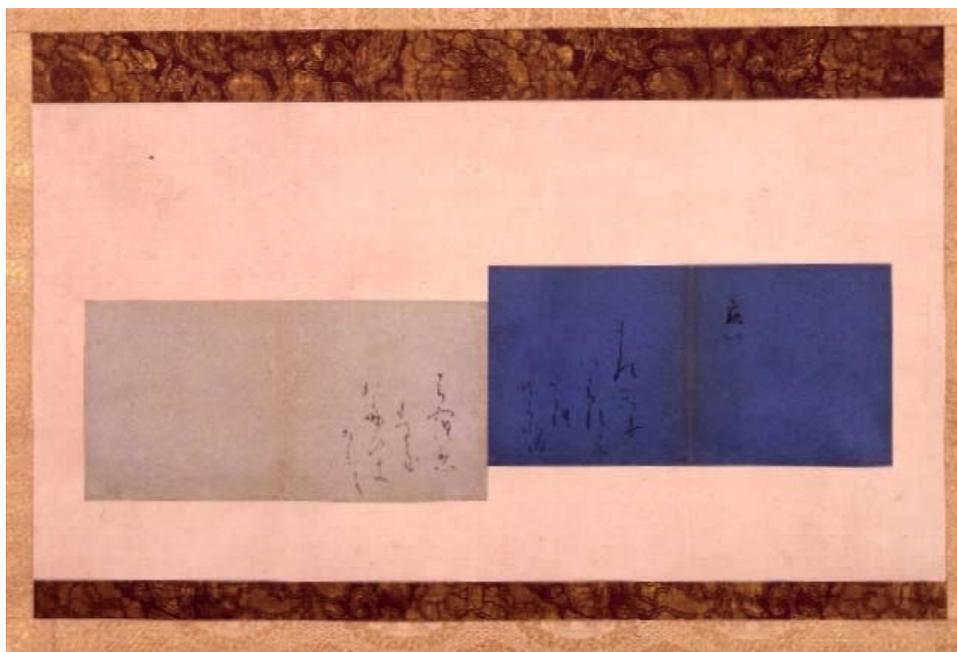
平安時代

法量 第1紙（縦13.2cm 横26.4cm）

第2紙（縦13.2cm 横26.5cm）

継色紙は、『万葉集』と『古今和歌集』の所収歌を抄写した粘葉装冊子本の断簡で、小野道風筆と伝えられ、寸松庵色紙（伝紀貫之筆）、升色紙（伝藤原行成筆）とともに三色紙と称される古筆切の名品である。

本幅は、『古今和歌集』巻第11，恋歌1に所収される第471番，紀貫之の歌を藍と薄藍の色紙に書写している。枯淡な書風に，雄渾で軽快な筆致は，格調高い平安貴族の美意識を反映している。平安仮名史上の優品として著名であり，また本来の形状を今に伝える類例稀な遺品として極めて価値が高いものである。



【考古資料】

10. 石製経筒せきせいきようづつ 一口

重要文化財（昭和14年5月27日指定）

平安時代

総高35.2cm ， 蓋径30.2cm

福岡県の西油山から出土したと伝えられる滑石製の経筒である。

滑石をくり抜いて円筒形に加工した筒形の胴部と、滑石を円板形に成形して四隅に削り込みを設け、花卉形に仕上げた蓋からなる。胴部には、承徳三(1099)年九月(刻字は「承得」)の如法経書写供養にかかる発願文と、結縁者の名前が線刻で刻まれている。

平安時代の紀年銘を有する滑石製の経筒として、我が国における経塚研究の上で高く評価されている資料である。



【工芸技術資料】

1 1. ^{ゆうぜんほうもんぎ}友禅訪問着 ^{いそうかさ}「位相重ね^{うるこかもん}鱗花文」 一点



^{もりぐち}森口 ^{くにひこ}邦彦 作

(重要無形文化財「^{ゆうぜん}友禅」保持者)

平成24年(2012年)

工芸技術記録映画対象作品

基本となる二等辺三角形を多様に組み合わせた意匠の作品である。二等辺三角の底辺の長さがわずかずつ変化しながら黒と梔子の黄、そして白の三角形が連続し、蒔糊による地を背景に不可思議な空間をつくりだしている。

作者は、伝統的な技法を受け継ぎながらも花や雪、流水等を幾何学文様で構成・表現する独自の作風を確立。その斬新で現代感覚溢れる作品の数々は、友禅の世界に新生面を拓いたとして、高く評価されている。

平成23年度工芸技術記録映画「友禅－森口邦彦のわざー」の対象作品。

12. えがすりつむぎきもの ほそづきあ 絵紺紬着物「細月明かり」 一点



さ さ き そ の こ 佐々木 苑子 作
(重要無形文化財「つむぎおり 紬織」保持者)
平成24年(2012年)
工芸技術記録映画対象作品

「細月明かり」のイメージを、鳥、月、星の文様で織り出した緯紺の作品である。鳥と三日月、そして星々を縦に配列した簡素な意匠構成で、単位文様の配列と間隔のバランスが良く、「細月明かり」を効果的に表現している。

糸は、生糸と玉糸紬糸を併用。緯紺は手くくりによる絵紺である。染色は、梔子で赤みのある黄に染めた後に藍を重ね、落ち着いた緑色を発色させている。

作者は、紬織物の風合を大切にしながら、紬織に絵紺を導入して独自の作風を確立した。その紬織は、自らの創作図案を紺として表現するものであり、植物染料によるやわらかな、品格の高い色調と相まって、高い評価を得ている。

平成23年度工芸技術記録映画「紬織－佐々木苑子のわざ－」の対象作品。

13. ご けんじょう はかた おり おび
五献上博多織帯 一点



おがわ きさぶろう
小川 規三郎 作
(重要無形文化財「けんじょう はかたおり献上博多織」
保持者)
平成24年（2012年）
工芸技術記録映画対象作品
幅30.5cm

「献上博多織」は、福岡市を中心とする地域に伝わる帯地用の絹織物の制作技術である。江戸時代には黒田藩がこれを保護し、毎年、帯地用の織物を幕府に献上したことから献上博多の名称が起こった。

その技法は平織ひらおりを基本とするもので、ジャカードを用いて浮き糸を吊り上げ、その下に緯糸を通し、経糸のみによって浮文様を織り出す。伝統的な文様は、仏具どっこの独鈷・華皿はなざらを抽象文様化したモチーフに縞を組み合わせた独特のものである。細い経糸を大量に用い、太い緯糸を固く打ち込むことによって、堅牢かつしなやかな帯に仕上げる。

平成23年度工芸技術記録映画「献上博多織－小川規三郎のわざ－」の対象作品。

14. ちゆうくろ みどうぞうがん か き ころ うみ 一点
鑄黒味銅象嵌花器「心の海」



みやぞの しろう 作
宮蘭 士郎 作

平成24年（2012年）

第59回日本伝統工芸展

文部科学大臣賞受賞作品

縦11.0cm 横36.2cm

高14.3cm

本作の形態は、古代の舟をイメージしたもの。黒味銅で鑄造した舟形の花器に、5種類の色金を用いた象嵌によって、漁火が光る穏やかな初夏の海景を描いた。

本作には、同人が得意とする加賀象嵌の代表的な技法である平象嵌の技法が用いられている。この技法は、金属素地の文様部分を鑿で彫り下げる時、表面より底部を広く削って溝の断面を台形にする「アリ立て」の工程を丁寧に行うことにより、象嵌の堅牢度を高めるところに特徴がある。

作者は、剣先鑿で彫ってアリを立てた溝に、22金、16金、白四分一、上四分一、並四分一を素材とする直径0.3ミリの金属線を平象嵌した。それぞれの色金の色彩が、極めて細い線のみで構成した意匠の中に効果的に用いられている。

15. けやきふきうるしりんかもりき 檫拭漆輪華盛器 一点



むらやま あきら
村山 明 作

(重要無形文化財「木工芸」もくこうげい保持者)

平成25年(2013年)

工芸技術記録映画対象作品

径41.2cm 高さ4.6cm

くりもの 削物は、木材を手作業で彫り、削って造形する技法であり、木工芸の技法の中でも曲線や曲面を自由に表現できるという特色をもつ。本作品は、複雑な木目をもち柵のある檫材から削り出したもので、器形を八弁の輪花形とし、見込面にも八弁の花形を彫り込み、内側面や畳摺には円弧状の彫りを加え、変化に富んだ造形としている。

平成24年度工芸技術記録映画「木工芸－村山明のわざー」の対象作品。

16. ^{せんしゅうあみすきうるしもりかご}千集編摺漆盛籃「^{はな}やすらぎノ花」 一点



^{かつしろそうほう いちじ}勝城蒼鳳(勝城一二) 作
(重要無形文化財「^{ちくこうげい}竹工芸」保持者)

平成25年(2013年)

工芸技術記録映画対象作品

径58.0cm 高さ13.7cm

本作の形態は、作者の自宅の庭に咲く古代蓮の花に着想を得たもの。素材には、塩基性の化学染料で先染めした真竹を使用した。まず、見込み中央の部分を、柁割にした真竹を用いて千集編(束ね編)で編み始め、網代編、縄目編で編み進め、口縁部から裏面に至るカーブを青海編で一続きに編んで造形した。そのまま裏面を青海編で編み進み、高台部分を縄目編、高台を鉄線編で仕上げた。盛籃の内部には、補強のために輪弧編の箎が一枚仕込まれている。

平成24年度工芸技術記録映画「竹工芸—勝城蒼鳳のわざ—」の対象作品。

おんた や き な な す ん ざ ら
17. 小鹿田焼七寸皿 一式



おんた や き ぎ じ じ ゅ つ ほ ぞ ん かい
小鹿田焼技術保存会 作

(重要無形文化財「小鹿田焼」保持団体)

平成24年(2012年)

高 5.0cm 径 22.3cm (10枚組)

小鹿田焼は、文禄・慶長の役後に伝えられた朝鮮半島の陶技が、筑前高取系の小石原こいしわらを経て現在の大分県日田市ひたまの小鹿田皿山に導入され定着したものと考えられ、その開窯は宝永2年(1705)のこととされている。以来、甕かめ、鉢、壺、皿、土瓶等の生活雑器を焼造し、周辺地域の需要に応じてきた。今日も伝統的製作工程による健全な作風が堅持されており、主として地元産の原料を用い、原料の製造・加工及び作品製作に伝統的な用具を使用する伝統的かつ地域的特色を有する技法が最も純粋に継承されている。

本作品は、伝承されてきた釉薬及び化粧土を生かして行う加飾技法による七寸皿10種(「薄青釉(薄セイジ) 刷毛目・櫛描き」「白化粧 飛び鉋」「白化粧 飛び鉋・櫛描き」「白化粧 櫛描き」「白化粧指描き・櫛描き」「白化粧 櫛描き」「白化粧 飛び鉋」「白化粧 飛び鉋(乱れ)」「薄青釉(薄セイジ) 櫛描き」「飴釉 刷毛目)。付属品として製作用具一式(刷毛2種、鉋、櫛、柄杓)が付く。

重要無形文化財「小鹿田焼」の指定要件に沿った伝統的な技術による作品である。

(参考)

重要無形文化財「小鹿田焼」指定要件

一 陶土は、小鹿田皿山で採取された原土を唐臼からうすで粉碎し、手作業で水籤すいひ・乾燥させたものとし、単味で使用する。

二 成形は、蹴轆轤けろくろにより、大物作りは、底打ちそこ、練付ねりつけ、腰継ぎこしつによること。

三 模様付けでは、伝承された刷毛目、飛び鉋、櫛目、指描き、打掛け、流掛け等の技法によること。

四 釉薬は、フラシ釉(透明釉)、地釉(飴釉)、セイジ(緑釉)、薄セイジ、黒釉、ドークとし、原料は、木灰、藁灰、長石、錆石、銅とし、調製は伝承された方法により、施釉は、生掛けを基本とする。

五 窯焚き(焼成)は、伝承された登窯によること。

六 伝統的な小鹿田焼の作調等の特質を保持すること。

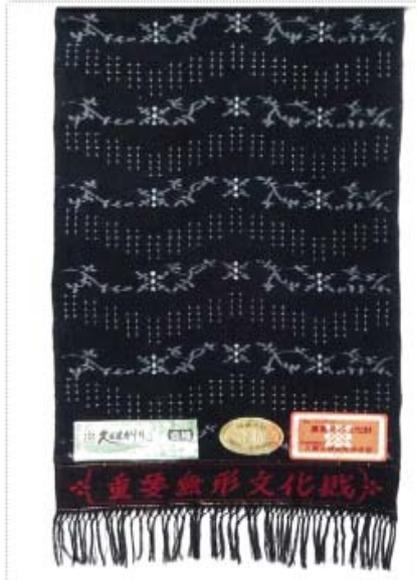
18. ^{く る め かすりきじやく あさ は} 久留米絣着尺「麻の葉くずし」 一点
 重要無形文化財久留米絣技術保持者会（^{お がわち たつ お}小川内龍夫）作
 （重要無形文化財「久留米絣」保持団体）
 平成24年（2012年）
 幅 39.0cm
19. ^{く る め かすりきじやく のぎく} 久留米絣着尺「野菊」 一点
 重要無形文化財久留米絣技術保持者会（^{お がた ひ で お}緒方日出夫）作
 （重要無形文化財「久留米絣」保持団体）
 幅 39.2cm
 平成24年（2012年）
20. ^{く る め かすりきじやく ゆき} 久留米絣着尺「なごり雪」 一点
 重要無形文化財久留米絣技術保持者会（^{さ と う ひ ろ み}佐藤博美）作
 （重要無形文化財「久留米絣」保持団体）
 平成24年（2012年）
 幅 37.5cm



18



19



20

重要無形文化財久留米絣は、手織機で投げ杼を用いて平織した木綿絣である。あらかじめ意匠に従って粗苧で手くぶりし、その後に藍染めして、白と藍色に染め分け、経・緯の絣糸とする。

いずれも重要無形文化財「久留米絣」の指定要件に沿った伝統的な技術による作品である。

(参考)

重要無形文化財「久留米絣」指定要件

- 1, 手くぶりによる絣糸を使用すること。
- 2, 純正天然藍で染めること。
- 3, なげひの手織機で織ること。

- 2 1. 伊勢型紙 突彫 変わり格子に桜 一点
伊勢型紙技術保存会 (生田嘉範) 作
(重要無形文化財「伊勢型紙」保持団体)
平成24年 (2012年)
28.4x51.9cm (13.8x39.8cm)
- 2 2. 伊勢型紙 突彫 竹垣に印籠 一点
伊勢型紙技術保存会 (内田勲) 作
(重要無形文化財「伊勢型紙」保持団体)
平成24年 (2012年)
30.1x52.1cm (17.3x39.7cm)
- 2 3. 伊勢型紙 突彫 寿客層層 一点
伊勢型紙技術保存会 (大杉明) 作
(重要無形文化財「伊勢型紙」保持団体)
平成24年 (2012年)
30.3x53.7cm (18.9x39.8cm)
- 2 4. 伊勢型紙 突彫 秋乱漫 一点
伊勢型紙技術保存会 (木村正明) 作
(重要無形文化財「伊勢型紙」保持団体)
平成24年 (2012年)
30.1x52.0cm (16.7x39.8cm)
- 2 5. 伊勢型紙 突彫 変り格子と草花 一点
伊勢型紙技術保存会 (野間得生) 作
(重要無形文化財「伊勢型紙」保持団体)
平成24年 (2012年)
29.4x53.4cm (14.6x39.8cm)
- 2 6. 伊勢型紙 錐彫 蕨熨斗 一点
伊勢型紙技術保存会 (宮原敏明) 作
(重要無形文化財「伊勢型紙」保持団体)
平成24年 (2012年)
29.9x52.1cm (15.3x39.8cm)
- 2 7. 伊勢型紙 錐彫 地落ちの麻 一点
伊勢型紙技術保存会 (六谷泰英) 作
(重要無形文化財「伊勢型紙」保持団体)
平成24年 (2012年)
30.2x51.7cm (16.6x39.7cm)
- 2 8. 伊勢型紙 縞彫 極微塵縞 一点
伊勢型紙技術保存会 (佐々木正明) (糸入れ: 松井俊子) 作

(重要無形文化財「伊勢型紙」保持団体)

平成24年(2012年)

30.8x47.9cm(17.4x38.6cm)

29. 伊勢型紙 道具彫 ^{どうぐぼり} ~わりもの・分銅^{ぶんどう}~ 一点

伊勢型紙技術保存会(今坂千秋)作

(重要無形文化財「伊勢型紙」保持団体)

平成24年(2012年)

28.5x51.4cm(15.0x39.5cm)

30. 伊勢型紙 道具彫 ^{かわ} 変り格子^{ごうし}に菊花^{きくか} 一点

伊勢型紙技術保存会(今坂国雄)作

(重要無形文化財「伊勢型紙」保持団体)

平成24年(2013年)

28.8x52.4cm(13.6x40.1cm)

31. 伊勢型紙 道具彫 ^{ちよう} 蝶^むの群れ 一点

伊勢型紙技術保存会(黒野睦雄)作

(重要無形文化財「伊勢型紙」保持団体)

平成24年(2012年)

30.5x54.7cm(15.2x39.8cm)

* ()内は彫刻部分の寸法

伊勢型紙は、三重県鈴鹿市白子、寺家両地域に伝承されてきた染色用の型紙製作技術である。上質の手漉和紙を柿渋で3、4枚貼り合わせた型地紙に、彫刻刀で様々な模様を精緻に彫りあげていくもので、その技法には、突彫、錐彫、道具彫、縞彫及び型紙補強のための糸入れがある。いずれも伊勢型紙技術保存会会員による重要無形文化財「伊勢型紙」の指定要件に沿った伝統的な技術による作品である。

(参考)

重要無形文化財「伊勢型紙」指定要件

一 突彫、錐彫、道具彫、縞彫等の彫刻は、伝統的技法により、手彫であること。

二 糸入れは、伝統的技法によるか、又はこれに準ずること。

三 製作用具等の調製は、代々の伝承に準ずること。

四 型地紙の調製は、伝統的技術により生漉きの楮紙に渋加工を施し自然枯らしとするか、又はこれに準ずること。

五 型紙の紋様は、古代型紙、小本等の古典的な図柄を参考にした価値の高いものであること。

六 染型紙製作においては、伝統的な伊勢型紙及び型染の優れた作調、品格等の特質を保持すること。

3 2. ^{ほんみのし}本美濃紙 ^{みみつききょうまぼん}耳付京間判 300枚

^{ほんみのしほんぞんかい}本美濃紙保存会（^{さわむらまし}澤村正・^{さわむらみよこ}澤村美代子，^{すずき}鈴木はぎ・^{すずきとよみ}鈴木豊美）作

（重要無形文化財「本美濃紙」保持団体）

平成24年（2012年）

工芸技術記録映画対象作品

京間判（二尺二寸 x 三尺二寸）66.6x97.0cm

3 3. ^{うすみのし}薄美濃紙 ^{みみつききょうまぼん}耳付京間判 200枚

本美濃紙保存会（鈴木はぎ・鈴木豊美）作

（重要無形文化財「本美濃紙」保持団体）

平成24年（2012年）

工芸技術記録映画対象作品

京間判（二尺二寸 x 三尺二寸）66.6x97.0cm

3 4. ^{みのぼん}美濃判 150枚

本美濃紙保存会（澤村正・澤村美代子）作

（重要無形文化財「本美濃紙」保持団体）

平成24年（2012年）

工芸技術記録映画対象作品

美濃判（九寸三分 x 一尺三寸三分）28.2x40.3cm

本美濃紙は、岐阜県美濃地方で発達した楮紙の製作技術。縦ゆりに横ゆりを加える独特の紙漉き操作による流し漉き、板干しによる天日乾燥などを特色とする。漉き上がった紙は、繊維がむらなく広がって美しく、江戸時代以来、障子紙として高く評価されてきた。

重要無形文化財「本美濃紙」の指定要件に沿った伝統的な技術による作品である。

平成23年度工芸技術記録映画対象作品。

（参考）

重要無形文化財「本美濃紙」指定要件

一 原料は、こうぞのみであること。

二 伝統的な製法と製紙用語によること。

1 白皮作業を行い、煮熟には草木灰またはソーダ灰を使用すること。

2 薬品漂白を行わず、填料を紙料に添加しないこと。

3 叩解は、手打ちまたはこれに準じた方法で行うこと。

4 抄造は、「ねり」にとろろあおいを用い、「かぎつけ」または「そぎつけ」の竹簀による流漉きであること。

5 板干しによる乾燥であること。

三 伝統的な本美濃紙の色沢、地合等の特質を保持すること。